

アンドレ・ジツドの方法 VIII

『法王庁の抜け穴』(その2)

——『鎖を離れたプロメテ』と『パリュード』をめぐって

陶 山 曠

B・フィロドーは、その大著『アンドレ・ジツドの遊戯性世界、ソチ』の中で、次のように語っている。

「子供時代は、失なわれた楽園のおもむきがある。子供たちは、楽しみと遊びの論理によって支配される。そこでは、社会と現実の論理からのがれることができる。ソチ作品のなかに、それがはっきりと見られる。⁽¹⁾」

彼は、ソチの世界を「幼少年性」*enfance*と「遊び」*jeu*の世界とみるかたわら、中世のカーニヴァルの世界とも対比する。

「中世において、カーニヴァルの日は、人々を慣習から解放し、自由なパフォーマンスによって、慣習をくつがえしきえする。ソチ(笑劇)は、これに由来する。その機能は二つある。ひとつは、安全弁の役割、また、支配秩

序が根底から問いなおされるのを避けることだ。⁽²⁾

「アクト・グラテュイ」の世界を、このように見ていくことは興味深い。他方、彼の結論のひとつは、いささか納得しがたい。

「無償（無動機）の行為は、ひとつのフィクションでしかありえない。危険を犯さないで、この行為を具体的な世界に置くことはできない。逆に、文学、人工遊戯であれば、すばらしい無償の行為となる。⁽³⁾」

無償の行為を、幼少年性、遊戯性、そして祭りという構図で、現実と対立し、かつ現実では不可能な行為、しかし、すばらしい芸術営為とすることは、私の『その1』の結論といささか矛盾する。現実の既成の社会を否定し、今一つの社会の夢、フィロドーによればカーニヴァルを作品中につくりだす。たとえそれが遊戯性、子供の世界であるとしても、既成の社会とは、いわゆる大人の社会でもあるのだから、そこまではよい。しかし、「ソチ」が「安全弁」であり「人工遊戯」であるとすれば、いささか納得がいかない。

まだ言及していない他の二作品、『鎖を離れたプロメテ』、『パリュード』を通して、B・フィロドーの構図をたどりながら、しかし少しづつ、私の結論におきかえてみたい。

一 『鎖を離れたプロメテ』

『抜け穴』の発刊より十五年前に書かれた一八九九年刊『鎖を離れたプロメテ』に、すでに「無動機の行動」une

action gratuite なる語が登場する。この作品は、しごく奇妙な物語である。現実的な小説ではない。かといって幻想的、神秘的小説でもない。単純なすじ立て、作中人物は、ギリシヤ、ラテンからとられた名をもつ、プロメテ、コクレス、ダモクレス、ゼウス、そしてボーイと一羽の鷲、最後の方に北欧の伝説上の人物、メリベ、前作『パリュード』の人物ティティルとアンジェルとなる。この小作品全体が、物語というより、「無動機の行為」についての哲学的コント、哲学論ともいえないこともない。したがって、作品発刊順では、一八九五年の『パリュード』より後となるこの作品について、先に考えてみたい。

この作品で「無動機の行為」と呼ばれるものは、ゼウスの行為である。この行為は、プロローグとして作品の冒頭に、次にカフェのボーイによってプロメテに、そして事件の当事者、コクレス、ダモクレスによって、最後に、ゼウス自身によって語られる。

事件とは、次のようなゼウスの行為である。

街でコクレスは、見知らぬゼウスのハンカチを拾い渡す。彼にゼウスは、封筒に任意の氏名、住所を書くことをたのむ。応じたコクレスが封筒をもどすや、ゼウスは、彼に平手打ちをくわせ立ち去る。無作為に選ばれた宛先人ダモクレスは、差出人のない封筒を受けとる。中には五百フラン紙幣が入っていた。

作中、この事件がくりかえし語られる度、無動機の行為として説明される。

△ボーイの語る無動機の行為▽

ボーイは、行為者ゼウスになり代ったように、作品ののっけから、この行為について滔々と開陳する。もっとも後で、彼は「観察者」として自分がゼウスと同じだという。

コーカサスの山頂から、突然、オペラ座にむかうマドレーヌ通りに降り立ったプロメテは、ボーイの店に入る。

この店では、見知らぬ人を三人、テーブルにつかせ食事をさせる。これをすでに無償の行為だとボーイはプロメテに語る。

パリの人々は、個性と特異性をさがし歩き回っている。だからボーイは、彼らの出会い語る関係をつくっている。この関係を創ること自体、自分のためでないから、無償の行為だと彼はいう。

さらに、無償の行為についてボーイは続けるが、その論理は、矛盾する、というよりわけがわからなくなる。

「人間と動物を区別するものは……無償の行為……。私は、人間を無償の行動ができる動物と呼んできた。その後、人間は、無償には行動できない唯一のものと逆に考えました。

無償で！ 故に、理由なしでと考えられる……お望みなら動機なしでとしておきましょう。」⁽⁴⁾

『法王庁の抜け穴』で親しい矛盾に満ちたとらえ方が、すでにあらわれている。ボーイはさらに、行為自体について、

「何によっても動機づけられない行為……利害、情念、何もない。自己から生れたが彼と利害をもたない、目的もない行為。したがって、支配者のいない行為、自由な行為。とすると、生れながらの行為かな？」⁽⁵⁾

『抜け穴』で、ラファディオの求めた行為と一致する。さらに、プロトスに翻弄されたラファディオの悲劇を思い出させるような一節、

「一挙に二つの無償の行為だ。

彼が選んだのではない住所への五百フラン紙幣、そして、ハンカチを捨てることで自然に選ばれた者への平手打ち……行為が無償だから、これは……逆に行うことができるものです。平手打ちのための五百フランを得た者と五百フランのために平手打ちを受けた者……そして次に、誰も何もわからない……そして、私たちは自己を見失なう。」

……したがって無償の行為程、風俗を乱すものはないでしょう。⁽⁶⁾

無動機の行為は、ここでも「意味の非意味」である。説明がつかない、何もわからない。人間は、結局、翻弄され、自己を失なう。そしてこれは、何よりも「風俗を乱す」反社会的行為なのだ。

△ダモクレスとコクレスの語る無償の行為▽

ゼウスの事件以来、ダモクレスとコクレスに共通するものは、彼らが自分たちの個性、特異性に気付いたことだ。ダモクレスは、奇妙な運命にまきこまれる。すると一般的な人間など存在しない、誰も似ていない、と気付く。「平凡な誰か」であったのが「ある人」になってしまった。この運命に従属し、決定されることになった。同様コクレスも、最初の行為、地上からハンカチを捨てることで、自己の存在が決定づけられたと思う。

ダモクレスは、この運命の全てが不可解となり、その後の暗い運命を予感する。

「いいですか……全てが互いにかみあい、説明される代りに、全てはこんがらがります。⁽⁷⁾

二人にとっても、無動機の行為は、説明されない運命となる。これは論理をよせつけず、論理を破綻させる。二人の運命については、後に、今一度考えることになるだろう。

△プロメテによる無動機の行為▽

プロメテは、自己の鷲について講演会を開く。プロメテの演説は、はじめから「論点先取り」petitionとされる。論点先取りとは、不当前提、論証を要するものを、すでに論証されたものとして前提のうちに加えること。彼の演説は、最初から非論理であり、解釈を拒否している。

その混乱した論理展開は、

「あらゆる論点先取りとは、気質の肯定です。そこには論理がないから、気質が確認されるからです。

……私は、人間を愛さない。人間をむさぼり食うものを愛する……（結論として）……したがって、鷲を持たなければなりません。ここで十分に証明されたと思います。⁽⁸⁾」

さて、混乱した演説だが、プロメテは、神話のように、自己と人間と鷲との関わりを語る。鷲がプロメテの肝を食べ、彼はやさ衰えていく。そして各人は鷲もっている。鷲は、人間を犠牲にして美しくなる。このようなことから、鷲を意識、人間の増殖していく自意識、あるいはずっとせばめて、芸術家と彼の創造する作品ととらえていくこともできる。しかし、演説を仔細に聞いていくと、どうも違う。演説の終るころ、プロメテは明言する。

「皆さんが、愛情をもって鷲を飼わなければ、鷲は、灰色でみすぼらしい、人目にふれることのない陰湿なものに

なってしまう。そのとき、鷲は、意識と呼ばれ……」⁽⁹⁾

このように、鷲は、人間の意識そのものでなく、その衰退時に変質するのが意識となる。ではいったい、プロメテのいう鷲とは、何なのだろうか。

彼は、神話の中と同様、まず、人類に火を与える。同情から、いくらかの火を与える。そのとき、人間が裸であることに気付く。同時に、その美しさを意識し、それで種族の繁殖が可能となる。原初の人間から、その後、連続とつづく人間があらわれる。人間のこの存在、存続についてのプロメテの言説に、ちょっといたづらを交えてみよう。

「最初の人間たちの美しさは、くりかえし言われ *se redire* (悲難される)、平等であり *égale* (どちらもよい)、無関心であり *indifférent* (どうでもよい)、そして、無造作な *sans histoire* (月経のない) ものであった。⁽¹⁰⁾

プロメテは、人間の存続を否定したいかのようだ。

でもさらに彼は、存在だけでなく、その存在理由も人間に与える。

「……(人間の) 進歩への貪婪な信仰を花開かせた。奇妙だが、進歩をつくりだすことで、人間の健康がすりへらされていくことを楽しんでいた。……もはや、よいことへの信仰ではなく、病的な希望となった。進歩への信仰とは、彼らの鷲のことなのだ。鷲が、私たちの存在理由だ。⁽¹¹⁾」

プロメテの鷲は、人間の意識ではない。芸術営為の象徴でもない。まず、人間の存続、自然な本能に導びかれる存

在に驚はかかわる。次に、人間の存在理由、他の動物と違う進歩、発展にかかわる。すなわち文明と文化である。これらを総合すれば、驚とは、歴史という時間の流れにある人間社会そのもののようなものだ。

ダモクレスの臨終後、再度、プロメテは演説をする。これも荒唐無稽な話だ。パリュードの作中人物、ティティルとアンジェールが、ボーイの店で、何事かが始まる街の喧騒に期待して坐っている。結局、裸身のメリベが、アンジェールを連れ去るだけだ。それまでティティルは、沼地を開拓(?)し、ひとつの文明社会を創り上げていた。しかしアンジェールを失ない、ティティルはもとの沼地でつり糸をたれる。プロメテが愛した原初の人間をあらわすだらうメリベが、全てを破壊したといえる。

その後、プロメテは、ボーイの店でダモクレスともども驚を食ってしまう。プロメテの話も、ティティルの話も、結局は、既存の人間社会についての話であり、最後には、この社会の崩壊で終る。ローマにむかうメリベは、ラファディオのようにこの社会を脱出し、ボルネオの深い森の奥に生きのびた猿人をもとめ、人類の可能性の始源を見積りに行くのかも知れない。

この二つの話(プロメテとティティルの)は、まさしく「裏返すことのできる」ものだ。プロメテのそれが暗い陰画としたら、ティティルのそれは明るい陽画である。ともに笑劇であるが、暗い笑いと明るい笑いとすることになる。またともに反社会的であるから「これ程、風俗を乱すものはない」ことになる。そして既成の論理の否定であるから、演説は、「論点先取り」となり「論理がない」ことになる。

作品の終りころ、コクレスはプロメテに聞く。

「あなたのお話は面白かったのですが、……けれど、関係がわからなくて……

プロメテは言う、

まださらに関係などあったら、あなたはあれ程笑わなかったでしょう。話し全てにあまり大きな意味をさがさないで下さい。⁽¹²⁾」

「非意味の意味」を読者は、さがし求めるだけを欲求されて作品は閉じられる。

少し戻って、今一度、驚が自意識でないことを考えてみる。

ボーイは、パリの人たちは、個性 *personnalité* と特異性 *idiosyncrasie* をさがして歩きまわっているという。ダモクレスもコクレスも、ゼウスにあやつられた結果、平凡で普通の人間ではなくなる。ダモクレスは、誰にも似ていない人間「ある人」になり、コクレスは、自己だけの存在理由と思われるものを発見する。ここで読者は、危妙な矛盾にとらわれるかも知れない。个性的ということとは、悪いことであるはずはない。しかしこの個性が、ダモクレスを悲劇におとし入れ殺す。コクレスは、その個性故に確信した人生をおくるようにみえる。しかし、全てはゼウスに支配され、驚のなせる策略である。この個性とは、既存の社会において人間の求めるものと考えてみる。ならば、ダモクレスの苦悩は、この社会での罪の意識、既存の倫理に対する自意識の悲劇といえる。コクレスは、社会に対するペテン、詐欺である福祉事業「片目の養育院」をつくる。既存の社会における茶番を演じ、ひとをかたり、自分もだます。いずれにしろ、個性は、社会の中にくみこまれている。だから、ダモクレスにとってゼウスは「良き神」となり、多分、寄付金あさりの献身家コクレスにとって、ゼウスは「銀行家、百万長者」になるだろう。ダモクレスは、『抜け穴』のフルリッソワール、コクレスは、サンプリ公爵夫人としてもよいだろう。

二 パリュード

パリュードは、様々な観点から読めるおもしろい作品である。しかしここでは、プロメテの節でふれた「個性」、「論理の矛盾」に限り考えていこう。作中の話者は、単調で平凡な人生に退屈し、個性、特異性をもとうとし、その行為として旅立とうとするが、彼の論理の矛盾故か、全てはだめになる。プロメテの話が陰画でティエイルの話が陽画とすれば、作品『プロメテ』は動的な絵であり、そのまま裏返すと、作品『パリュード』が静的な絵として重なりあうといえるだろうか。

パリュードの話者は、ティエイルが主人公のパリュードという作品を書いている。彼は、これを自己の単調で凡様な姿でもあるし、他者のそのような姿でもあると思う。実業家で福祉家でもあるユベール、貧しいが誠実に生きるリシャール、そして女友達アンジェール、皆、過去をくりかえすだけの生を生きる。話者は、彼らの盲目を気付かせようと忠告する。

アンジェールのサロンで開かれた夜会は、まさにその機会となった。

訪問者に彼は、旅への出発を宣言する。突然の思いがけぬ驚きのための旅。しかし誰の興味もひかない。彼は、ティエイルと同じ様に孤独。その説得は、常にかまわりをする。プロメテの演説に似る一節、

「人は出かけない……これは誤りだ。そうではなく出かけられないのだ……しかしそれは、出かけないからだ……。人は出かけない、なぜなら、自分がすでに外にいると思うからだ。もし閉じこめられていると知れば、人は少なくとも出かけようとする欲望を持つだろう。⁽¹³⁾」

あまり明解でない。さらに次の論は、裏返しのできる反論まで用意させる。

「自分が幸せであると思うために盲目であること。それを見ようと努力しないために、すでにはっきり見えてい
ると信じていること。なぜなら、人は、自己を見ることが不幸にしかなりえないから。」

……………

盲目であることで幸せになること。それを見る努力をしないため、すでにはっきり見えてい
ると信じていること。なぜなら、人は、自己を見ることが不幸にしかなりえないから。⁽¹⁴⁾

いずれにしろ、このからまわりから脱出するためには、「自由な行為」をしなければならぬ。自己が、凡様な他
者と違い、特異性をもつことで、自由な行為ができるだろう。さもないと、目を使わないために視力を失なう暗い闇
の洞窟にすむ動物になりおおせる。そのとき、話者を代弁するかのようになり、人間の特異性を強調するヴァランタンが
あらわれる。

「健康は……………一つの均衡、凡様なことだ……………私たちは、他人と違うことによってしか価値をもたない。特異体質
idiosyncrasie は、価値ある病だ。……………大切なことは、私たちだけが所有しているもの……………他のいかなる人にも見
出せないもの……………したがって、正常な人間の持っていないものである。故に、今や病人を欠如とみなすのをやめよ
う。逆に、それ以上の何かだ。せむしは、一人の人間プラス瘤である。⁽¹⁵⁾」

このとき、個性とか、特性とか呼ばれていたものが、はるかに極端な特異体質、病におきかえられる。話者が説得していたものは、もともと他者に納得させえないものかも知れない。論理の破綻は、ここでも、論理の違いに由来するようだ。作品の始めの方で、話者は、テイテイルの釣りについて、「象徴の真実」または「心理的眞実」といい、論理の矛盾を説明する。話者のいう単調な生活、それを破る個性、その行動である旅は、既成の社会でその語がもつ意味とは違う。説明できない真実とならないか。既成の論理をもつ社会の否定である。だから話者の口から唐突に、革命家という言葉がとび出す。

「——ぼくが不満に思うのは……人々が反抗しないことだ。

——……あなたは、まさに革命家なのです？

——……ぼくが不満に思うのは、分配ではない。……風俗 *moeurs* についてなのだ。⁽¹⁶⁾」

少しはなれて、

「革命家、多分、ぼくは革命家だろう。何よりも反対者への恐怖の故にそうだろう。⁽¹⁷⁾」

他者を説得しうるものなら、話者は、革命家ではないと思う。反対者に説明できない真実、それを表現できない話者は、夢の中で、妖怪のようにのしかかる観念の増殖に苦しめられる。

「ああ！ ぼくは眠りに落ちようとしていた。……いいや、増大する小さな観念について、さらに考えようとして

いたのだ……その進展は、ぼくにはわからない……今や観念が巨大となっている……ぼくをとらえている……そうして生きようとしている。観念の生存方法……それは重い……ぼくは、それを表現しなければ……これは神のように重い……この不幸よ！ さらに今一つの表現を！……観念が増大し、ぼくは小さくならなければならない。⁽¹⁸⁾

まさしくプロメテの鷲にさいなまれる話者となる。論理は、増大し、破綻し、唯一つの表現も見出せない。

この解決には、旅、冒険しかないだろう。二つの狩の話、ユベールと話者の話が、旅の出発前夜にアンジェールに語られる。しかし陳腐な話である。ブランコにのって打つひよう狩り、奇妙な空気銃による沼地のかも獺。結局は、単調な単彩画のような朝、アンジェールとの旅立ちは、みじめな失敗となる。

旅でみた「うまのすずくさにふちどられた道」はただひとつ話者をとらえる。「うまのすずくさ」は、分娩を容易にする薬草だ。日曜日と題されるこの作品の終りに、話者は、読者に何かを訴えようとする。彼は、旅の悲しみは「うまのすずくさ」で説明できるかと考える。

そして、奇妙な吐露をする。

「重くのしかかるのは、行為をくりかえす必要だ。ここに、ぼくが少しも理解できない何かがある……アンジェール、ぼくたちの関係は、とてもはかないものなのだ……」

彼女は……快樂をおそれる、おそらく彼女を殺してしまうものとして。

愛する人よ、ぼくたちは、そこから人間の息子たちが生れてくる者に属していない。⁽¹⁹⁾

反自然の宣告。しかし話者は、「個別的な主題を芸術が描けば、一般性はそこに含まれる⁽²⁰⁾」といっている。一般化

の可能性があれば、それは、読者のすることだとも。
 そのように、作品の終り、話者はひとりごちる。

「全ての苦悩よ！ 小さな部屋にいる肺病者の苦悩、日をもとめてのぼってくる鉱夫の苦悩……岩をころがす
 シジフォスの抑圧感、奴隷状態の人々全ての息苦しさ……他のいろいろな苦しみ、これら全てを私は知っていた」⁽²¹⁾
 『抜け穴』に、『プロメテ』と『パリュード』は、十数年余の年月をへても、密接に、あるいは直接に結びつく。
 ジッドが、この三作をソチと名づけたのは、あながち、芸術的観点だけではないと、私には思われる。

註

- (1) B. Filaudan : L' Univers Judique d' André Gide (José Corti) p. 228
- (2) Ibid. P. 257
- (3) Ibid. p. 364
- (4) A. Gide : Le Prométhée mal enchainé (Gallimard) p. 20
- (5) Ibid. p. 21
- (6) Ibid. p. 23
- (7) Ibid. p. 43
- (8) Ibid. pp. 82-83
- (9) Ibid. p. 101
- (10) Ibid. p. 91
- (11) Ibid. p. 92
- (12) Ibid. p. 151

- (13) A. Gide : Paludes (Livre de poche) p. 62
- (14) Ibid. p. 64
- (15) Ibid. p. 76
- (16) Ibid. p. 81
- (17) Ibid. p. 86
- (18) Ibid. p. 87
- (19) Ibid. pp. 124-125
- (20) Ibid. p. 72
- (21) Ibid. p. 129